

とりわけ3点目に関しては、西牧氏から、目録等のデジタル化とその公開作業などを特別支援教育総合研究所で行うことができるかもしれないとの趣旨の発言もあり、史資料問題に関しても特別支援教育総合研究所の果たす役割への期待は大きい。

指定討論後、「史資料の保存は現地主義でなくてはだめだ。その場にあつてこそ意味があるのではないか」などの意見がフロアの参加者から出され、議論が行われた。(文責 野口武悟)

## 自主シンポジウム 40

### 発達障害児におけるナラティブの 発達支援

—自己の経験・ストーリーをわかりやすく  
伝える力を育てる—

企画者 仲野 真史 (筑波大学)  
大井 学 (金沢大学)  
司会者 仲野 真史 (筑波大学)  
話題提供者 松本 恵子 (八千代市立八千代台小学校)  
大槻美智子 (香取市立佐原小学校)\*  
仲野 真史 (筑波大学)  
指定討論者 大井 学 (金沢大学)

\* 都合により大槻氏は当日参加できなかったため、当日の発表は長崎勤氏 (筑波大学) が代わって行った。

#### 1. 企画趣旨

近年、ナラティブの発達の意義が指摘され、教育においてもナラティブへの関心が高まりは始めている。例えば、「今・ここ」にない出来事を「わかりやすく」語ることは、一次的ことばの水準から、二次的ことばの水準への過渡的段階と位置付けられ、学習指導要領においてナラティブに関連する項目が多数挙げられている。一方、発達障害児はナラティブに困難性を持ち、そのことがことばを媒介とした経験共有の妨げの一因となっている。本シンポジウムは、「ことばの教室」等で行われてきた支援実践を検討することで、ナラティブの発達支援の意義と方法について考えることを目的として行われた。

#### 2. 話題提供

(1) 会話を通した自己経験の語りから絵話への発達支援 (松本恵子氏)：PDD 傾向、意味・語用面のつまづき、緘黙傾向のある児童に、自己経験の表現や

構文への支援を行った経過が報告された。①「今、ここ」での活動における動作表現が主であった時期は、視覚的手がかりをもとに交互に伝えあう活動が中心で、話題はA児の気になる点に終始した。②ランダムに自己経験を語り始めた時期は、事柄の順序を整える支援を行った。非言語的ジェスチャーやTとの共同作業による因果関係の表現が可能になってきた。③絵話を用いた指導を9歳初期から実施した。時系列を表す語の自発的な使用が可能になった。登場人物の心的状態の理解について、着目したい行動や表情の指摘とやりとりを通した支援を行った。その結果、因果関係や信念の理解・表現が促された。

(2) 共有の場でポップコーン作りのプランを仲間に伝える (大槻美智子氏；当日の発表は長崎勤氏が行った)：自己表現や対人関係に課題をもつ高機能広汎性発達障害の児童に対して、「体験したポップコーン作りの楽しさを多くの人に知らせる」という場面を設定し、指導を行った。実演しながら作り方を伝える活動を繰り返し、相手を意識してわかりやすく伝えることを目標とした。伝え方に対する段階的援助を行うとともに、伝える場面の集団サイズを段階的に広げていった。その結果、設定された場面の中では、20人程度の集団に対しても自分のことばで語ることが可能となった。活動後の「振り返り」では、相手を意識してわかりやすく伝えることへの気付きが可能になった。また、伝えようとする意欲が増し、「振り返り」の場面では進んで自分の思いを表現できるようになった。

(3) PDD 児への指導事例を通したナラティブ支援方法の検討 (仲野真史)：PDD 児を対象に絵本作りや show & tell 活動を通してナラティブ産出を支援した事例を振り返り、相手の発話や視覚的手がかりなどの外的媒介を利用しながら、子どもがナラティブを生成したプロセスを検討した。これを通して、有効な支援のあり方について考察した。ナラティブの構造的側面についてだけでなく、子どもと指導者の間で出来事を共有するための手段としてのナラティブの機能に着目することの必要性が指摘された。また、指導においては、子どもの能動性や目標行動の文脈における必然性を考慮することの重要性が指摘された。

#### 3. 指定討論 (大井学氏)

話題提供のすべての事例が ASD およびその傾向がある児童への支援に関するものであったが、高機能自閉症児やアスペルガー症候群の子どもにおいては、生涯発達という長期的視野からみたときに、ナラティブ

## 第46回大会シンポジウム報告

パフォーマンスに大きな変化がみられる。そのような長期的な視野をもち、そのもとに個々の支援は位置づけられるべきであるとの指摘がなされた。また、支援の具体的な方法については、設定された指導場面と日常のコミュニケーション場面をいかにつないでいくのか、つないでいけるのかという点への問題提起がなされた。さらに、子どもが抱えるナラティブやコミュニケーション上の問題に関して、会話相手である大人の果たしている役割について考慮することの必要性が指摘された。(文責 仲野真史)

## 自主シンポジウム 41

## 個に応じた特別支援教育実践の追究 X

—自分らしくハッピーに生活していく  
ための自閉性障害への支援—

企 画 者	檜木 正美 (北海道南幌養護学校)
	松井由紀夫 (北海道南幌養護学校)
	市澤 豊 (星槎大学)
司 会 者	笹川 美和 (北海道拓北養護学校)
	平間 俊二 (北海道夕張高等養護学校)
話題提供者	西川 満 (北海道小平高等養護学校)
	松谷 香里 (北海道釧路養護学校)
	富山 聖子 (北海道南幌養護学校)
	竹田 ゆか (北海道恵庭市立恵庭小学校)
指定討論者	河合 健彦 (市立札幌病院静療院)
	前川 政則 (北海道南幌養護学校)

## 1. 企画趣旨

私たち協働研究グループは、「一人一人の人間の限らない成長・発達を支援する」という視点で1999年から連続して自主シンポジウムを企画運営してきた。これまでの議論から、何よりも子どもやその家族にとって親しみをもって理解される「ハッピー」という共通目標概念に至っている。「ハッピー」とは、一人一人の人間が「自分らしさ、人間らしさ」を発揮して生きていく状態を包括した用語である。今回のシンポジウムでは、3つの教育実践について話題提供した。議論を自閉性障害の子どもたちが自分らしく環境に適応していくための支援教育について臨床心理的側面から焦点化し、それぞれのハッピーを求める「個に応じた教育」について討論した。

## 2. 話題提供

(1) 西川は、「青年期後期に向かうA男(重度の知的障害、自閉症)のハッピーの見守り」と題して、3年間担任し、この春に高等養護学校を卒業して生活介護事業所に入所したA男への支援の取り組みについて、昨年に引き続き話題提供した。「すべてはA男のハッピーを繋げるために」ということで、生活介護事業所との連携がスムーズに進み、受け入れ態勢を整えることができた。卒業間際、①本人らしさや本人の想いを尊重しつつ周囲と折り合いをつけ信頼関係をつくること、②仕事や余暇に充実感・達成感をもつことがA男のハッピーに繋がっていくと考察した。ところが、家庭での生活が不安定となり、現在医療機関に入院中である。寄宿舎での集団生活から家庭生活への移行の難しさについて提言した。

(2) 松谷は、『甘え』を信頼関係への芽生えととらえたB男(小学4年、重度の知的障害、自閉症)とのかかわり」と題して、「しっくり感」を手がかりとして実践した事例について話題提供した。B男は担任して3年目になるが、医療機関から薬を処方されていた。また、担任と関係者(医師、心理士等)によるケース会議では、学校での生活をよりわかりやすく提示すること等について確認された。この時期のB男は、他者をつねる、咬む等の行為が頻繁にみられたが、しかし、内面状況はどうしようもないほどの不安定な状態とは思えなかった。それは、抱っこをしているときの「しっくり感」においてであった。このようなB男とのかかわりから、「甘える・甘えられる」という行為と「安定した生活」について考察したことについて報告した。

(3) 富山と竹田は、「苦しみながらも自己主張しながらフィールド内での存在位置を見出しつつあるC男(小学3年、通常学級、自閉症)への支援」と題して、幼児期に高機能自閉症と診断を受けたC男が通常学級で生活適応していくための支援の取り組みについて話題提供した。富山は、教育相談室の立場から、C男自身による環境への適応的な調整と参加、それを支えた担任の学級づくり、教育相談を通して行った母親と担任へのコンサルテーションについて報告した。竹田は、小学校の担任からみた南幌養護学校教育相談室の存在と役割について、①子ども・保護者・担任を孤立させない存在、②それぞれをつなぐパイプ役、③子どもについての共通理解をもつ場、④よき理解者でありパートナーである、と報告した。